

日本西蔵学会々報

第十三号

Report of the
Japanese Association
for Tibetan
Studies

No. 13
Sept. 30th., 1966

昭和四十一年九月卅日発行
編集発行人 三上 聰 謙
高橋 盛孝
発行所 吹田市千里山
関西大学東西学術研究所内
日本西蔵学会

河口慧海老師の 生誕百年を迎えて

壬生台 舜

河口慧海老師は慶応二年（西暦1866）一月十二日、和泉国、大阪府堺市北旅籠町西三丁目六番地に生れた。——その生地は堺市で、標示の石柱を建ててある。

この堺市という土地は、日本美術の保存に貢献した正木直彦、日本の和歌に新しい感覚と表現をとり入れた情熱の詩人、与謝野晶子及び河井醉茗、日本演劇の中で、喜劇を独立させた曾我廼家五郎、強い日本人的正義感で「浪六もの」を文芸の世界に樹立した村上浪六、日本画の島御風と成園の親子などを生んでいる。これは四〇〇年前、堺商人という黄金時代（一五五〇年、スペインの宣教師フランシス・ザヴィエルが九州から堺に来てから、南蛮貿易とよばれる東南アジア及びスペイン、ポルトガル、オランダなどの商船が入港し、堺の町が栄えた。その頃、キリスト教宣教師達に

より東洋のヴェネチアと呼ばれる程に自由都市として国際的に有名であった）を築きあげた進取の気性に富んだ人々を受け継いだ血潮が、近代文明の夜明けを迎えた十九世紀の後半に、再び、その自由な精神を取り戻したものである。

更に、その黄金時代は豊臣秀吉の大坂城構築によってこわされたけれども、湯川宣阿、日比野了慶などの財閥や南蛮貿易の第一人者呂宋助左衛門（納屋助左衛門）茶の湯の千利休、秀吉のお気に入りの頓智の曾呂利新左衛門などが輩出し、織田信長以後、明治まで、日本の支配者の直轄領として奉行の下に、町民の自治組織が作られた特別政治地区であった。このような諸大名の支配をうけない自由都市は権力をおそれない精神を持つ地域社会を作り出す結果となった。このように、進取に富み、権力をおそれない自由な精神は、河口先生を含めた前記の人々に流れる共通の意識である。

また、生誕の一八六六年という時点は、東洋史の白鳥庫吉先生、インド哲学の高楠順次郎先生の生れた時である。偶然にも東洋学関係の三大巨匠が同じ年に生れている。更に Sven A. Hedin (1865~1952) はその前年に生れている。また日本のチベット学の先駆者が河口先生であるとすれば、歐洲のチベット学の先駆者は Károly Csoma

Sandar (1784-1842) であるが、その著 Tibetan Grammar が刊行されたのは一八三四年であった。また Emil Schlagintweit が Die Könige von Tibet をミュンヘンで刊行したのが一八六六年である。更に Yäschke が Tibetan Grammar を出したのは一八七六年であった。このように河口先生の生れた年には、歐洲ではチベット学が言語学的にも歴史学的にも、研究されていたわけである。

自由と進取に富んだ土地に、このような時代に生れた河口先生は、幼名を定治郎といい、父善吉、母常の長男として生れ、次男梅吉、三男岩吉（西河家をつぐ。宝山と改名する）、四男善七（半瑞と改名する）、五男竹松、末っ子はセイ（結婚して竹野を名のる）の六人兄弟である。父親は樽を作る職人で、信貴山の毘沙門天を信仰していた。母親は御典医の娘で、早く父親を亡くした関係で、樽桶製造人と結婚したらしい。しかし、氣丈夫で、しっかりとした判断力と実行力を持ち、「父が仏の善吉」といわれたことと対照的であった。母親の信仰は浄土真宗であった。末娘のセイさんは、現在もお元気に暮しておられるが、お茶の水の東京女高師に進んだ方であるが、兄弟皆、頭の良い方々であるのは、この母親の影響が強いようである。

五才にして寺小屋である世学院に学び、翌年明治五年、錦西小学校に入り、十一才の時に退学し、家業を手伝った。十三才河辺和一郎の夜学に行き十四才、土屋弘の晩晴塾に入った。ここで約十年漢籍を学ぶ。この晩晴塾は、島村清吉、河野学一、真田実浄、肥下徳十郎、正木直彦など多くの人材を輩出した。

その間に「釈迦一代記」を読み、大いに仏教の関心を深めた。そして明治十三年十月二十五日に禁酒、禁肉食、不淫の三ヶ条の誓願を起し、十年間守り続けた。病気のため禁肉食は一時中断したが、その後再びこの三ヶ条の誓願を一生涯つらぬき通した。明治時代は僧侶の肉食妻帯が公然と認められた自由な時代である。と同時に、仏教々団の戒律主義が弱まる傾向に入った。この時代の流れにまき込まれず、敢然と自己の主体性を主張した河口先生は意志の強い性格の持ち主である。あの西藏旅行記を読んでも、随処に意志の強い性格があらわれている。殊に、ダウラギリ（八、二二二米、スイス登山隊一九六〇年登頂成功）の中腹で、飢えと寒さに耐えながら突破するなど、河口先生にして初めて可能だと言っても過言ではない。

河口先生は二回も西藏旅行を計画したので、一見大胆で無鉄砲のように理解する方がいるが、実は注意深く用意周到、正確緻密を重じた。例えば昭和十五年、74才の時に、蔵和辞典編集を開始するに当って、その仕事の遂行のため冠婚葬祭等の一切のつき合いを止めると世間に発表し、編集事業の専念に踏み切った。また一八九四年（28才）、釈興然師についてパーリ語を学び、インド事情を

研究してからインド旅行を計画した。第二回チベット入国は入国準備にネパール、インドに八年も過して万全を期した等々、河口先生の前述の性格を裏付ける行動に過ぎない。従って、情緒安定した意志の強い性格は、正しいものには真ししくらに向うという結果になります。

次に、河口先生は粘着気質と分裂気質との傾向の強い方でした。正しいものに対して強い行動性を示すと共に、一切の妥協を排除する。例えば一八八四年（18才）に、徴兵令反対のため上京、天皇に直訴を企てたとか、28才の時には、黄檗山の改革を計り、山内退去を命ぜられながらも、その浄化運動に邁進してやまなかった等々、その顕著な行動であった。

河口先生は、ライフワーク蔵和辞典の編集事業の半ばにして戦雲急をはらんだ昭和二十年（1945）二月廿四日、世田谷区代田一丁目の自宅二階で脳溢血のため倒れた。七十九才の生涯を終えた近世仏教界の偉人の葬式も二十六日、まことにさびしく行われた。これも戦争のためであった。その後父母の墓のある谷中の天王寺に葬られ、更に昭和三十三年四月、十三回忌には、世田谷の九品仏に記念碑が建られるようになった。

河口先生は日本人として始めてチベットに入りその後、寺本婉雅、青木文教、多田等観、矢島泰次郎の各氏が続いてチベットに入る先鞭を作られた。日本チベット学の始祖である。また、仏教興隆の熱心な実践者でもあった。時代に適應する仏教の在り方として在家仏教を提唱し、自らもその範を垂れた実動家であった。更にチベット関係の研究資料を蒐集し、わが国に残されている。その

主なものは、東洋文庫・東京大学・東北大学に保存されており、多田等観先生の東北大学にあるチベット資料と共に、将来の研究者を益するところが、まことに多大である。

以上、生誕百年に因んで、河口先生の生れた時代とその土地柄、及びその性格を考察することによって、河口先生の偉大さの拠って来るところを描出した次第である。尚、参考文献を掲げる。

宗川宗満 服部融泰 河口慧海師略伝並年譜 昭2
 青江舜二郎 河口慧海（少年伝記文庫） 昭32
 河口 正 河口慧海（春秋社） 昭36
 浅田一編 河口慧海師伝（未刊）
 河口慧海 西藏旅行記（博文館） 昭37
 〃 〃 （山喜房） 昭16
 〃 〃 第二回チベット旅行記（金の星社） 昭41
 壬生台舜 河口コレクションに就いて（日本西藏学会々報第二号） 昭30
 〃 〃 河口慧海著西藏旅行記（読売新聞 昭41、2、20）
 河口慧海 在家仏教（世界文庫） 大正15
 〃 〃 正真仏教（古今書院） 昭11

王統鏡に伝える

トンミの著作

稲葉正就

「プトン史」などの史書に、第七世紀初頃のソンツェンガムボ王によってインドへ派遣されたトンミサムポータ Thon mi Sambhota が、帰国後